

# 日本語の「～とは思ふ。」から覚える違和感の正体

武 村 朝 吉

## 要 約

日本語の「～とは思ふ。」から覚える違和感の正体は何なのか。日本語の助詞“は”と“が”についての先行研究の中に見られる“は”と“が”の使用原理を検証し、それら使用原理を更に掘り下げたところに「は」と“が”の文法的な働きの「核心」を提示し、それに基づいて、「～とは思ふ。」の違和感の正体を解き明かした。

## 0. はじめに

オリンピックに出場する選手がマスコミのインタビューに応じて、「頑張ろうとは思ひます。」「ベストを尽くそうとは思ひます。」「金メダルを取ろうとは思ひます。」などと抱負を語る。「頑張ろうとは思ひます。」「ベストを尽くそうとは思ひます。」「金メダルを取ろうとは思ひます。」ならすっきり腑に落ちるのだが、「～とは思ひます。」のように“は”が入ってしまうとどうも妙な違和感を覚えてしまう。その違和感の正体は何なのか、また“は”が入り込んでしまう原因は何なのか、解き明かしてみたいと思う。

### 1. 1. 先行研究

日本語の助詞“は”（以下「ハ」）については、その用法が助詞“が”（以下「ガ」）のそれと近似する場合が多いことから、古くから両者の比較・対照研究という形で多くの研究成果が蓄積されてきた。

坂野（2014）は、増井金典が行った22項目に及ぶハとガを比較・対照<sup>i</sup>について、「…略、これらはハとガの現象をさまざまな観点から観察した結果にすぎず、いくら項目を並べ立てても問題の本質がたちあらわされてくるわけではありません。もとより、こんなにおおくの事項を参照しながらハとガの使い分けがおこなわれるはずもないのです。」<sup>ii</sup>と批判している。坂野（2014）は、使用基準を集約する方向へ議論を展開し、ハとガの問題の本質的な使用原理を求めるため、野田（1996）が全ての先行研究を集約した以下5つのハとガの使い分けの原理<sup>iii</sup>について詳細な検証作業を行っている。

1. 新情報と旧情報の原理
2. 現象文と判断文の原理
3. 文と節の原理
4. 対比と排他の原理

## 5. 指定と指定の原理

坂野の検証作業は、野田（1996）によって集約された5つの基準それぞれについて、集約される前の先行研究を総括しながら、反証を示すというものである。5. の「指定と指定の原理」については、“指定”と“指定”がともに明確な概念規定を欠いているとして対象から外し、専ら1. ～4.について反証を示しつつ詳細な検証を行っている。提示された反証によって、野田（1996）の5つの原理はどれも部分的には説得力は残しながらも、厳密な意味において、ハとガの使用基準としての価値を失っている。坂野（2014）は、いわばハとガの使用基準を求める先行研究の成果を初期化した上で、語と語を有意義に関連付けるという助詞本来の働きを徹底的に見るという方法で、ハとガの使用原理を求め、以下のように提示している。

「～ハ」の「～」は、後項に言及することがらが引き出される、そのもとになるものとして呈示しておくことがらです。これを端的に「前提事項」とよぶことにします。…略…一方、「ハ～」の「～」は、呈示されたことがらにかかわって、述べることがらです。それをかりに「叙述事項」とよぶことにします。そうすると、「～ハ～」という文は、「前提事項」と「叙述事項」をハでつなげたものということにとりあえずなります。「前提事項」は「叙述事項」の言及する案件をまえて設定しておくものです。その設定を受けて、「叙述事項」が述べられます。「叙述事項」は、「前提事項」を発起点として、そのもとで言及することのできることがらを述べるものです。<sup>iv</sup>

「～ガ～」は、一つの結合体です。その前項は、当の結合体の、当の前項です。その後項は、当の結合体の、当の後項です。当の前項と当の後項が結びつく、そこにひとつの特別な事態の表現が成立します。…略…「～ガ～」は、「当該事物」と「当該

事項」とを、ガが結びつけることを表します。「当該事物」と「当該事項」とは、ひとつの特別な事態を構成するために、唯一無二の特別な関係において結びつきます。<sup>iv</sup>

## 1. 2. 坂野(2014)の「ハの使用原理による「～と思う。」の解釈

- ① 頑張ろうと八思います。
- ② ベストを尽くそうと八思います。
- ③ 金メダルを取ろうと八思います。

坂野(2014)の「前提事項」と「叙述事項」をつなげるというハの使用原理に基づいて解釈すると、①②③の前提事項は、それぞれ「頑張ろうということについては」「ベストを尽くそうということについては」「金メダルを取ろうということについては」であり、それらが、ハによって「思います」という「叙述事項」と繋げられることから、前後の意味関係は概ね以下のようなものになると理解される。

- ①' 頑張ろうということについては、そう思います。
- ②' ベストを尽くそうということについては、そう思います。
- ③' 金メダルを取ろうということについては、そう思います。

ここで問題なのは、①' ②' ③' に「～と思う。」から覚えていた違和感がないということである。なぜ、「ハの使用原理」に基づいた解釈で、実際「～と思う。」から感じられるものと同等の違和感が出てこないのか。ハの使用によって出現する全ての事柄を説明し得るはずの「ハの使用原理」に基づいた解釈で、その違和感出てこないのは奇異なことである。違和感のなさが事実であるとすれば、その「ハの使用原理」の奥により核心的な原理が存在している可能性を示唆していることになる。

「ガの使用原理」についても、核心的なガの働きの一歩手前のものである感がある。本稿の目的は「～と思う。」について論じることなので、ガについて詳述することは避けるが、次章にハとともに、筆者の考えるその文法的な働きの核心を提示しておく。

## 2. 1. 筆者の考える、「ハとガの文法的な働きの核心」

筆者は嘗て日本語講師として外国人に日本語を教えていた経験から、殆どの事例の説明が可能なハとガの文法的な働きに関する理解を得ていた。以下のような理解（以下「筆者仮説」）である。

□ハの文法的働きの核心は「限定」である。



図1 ハの文法的働きのイメージ

□ガの文法的働きの核心は「強調」である。



図2 ガの文法的働きのイメージ

ハの文法的働きの核心は、その前に位置する語句の表す事柄を限定すること、つまり、図1「ハの文法的働きのイメージ」のように、数多く存在する類似する事柄の中から特定のものを限定し浮き上がらせることである。ハによって限定された事柄は浮き上がり、限定されなかった類似する事柄も漠然とした形で同列に存在し続ける。

ガの文法的働きの核心は、ガの前に位置する語句の表す事柄を強調することである。図2「ガの文法的働きのイメージ」のように、ガによってスポットライトを浴せられるように強調された事柄は、いわば上位列に浮上し突出される。スポットライトの当たらない類似する事柄は、同列には存在しない。

## 2. 2. 筆者仮説による野田(1996)の5つの原理の解釈

1.1. で見た野田(1996)の5つの使い分けの原理の内、2. と5. の不足については坂野(2014)によって立証されているので、ここでは1.3.4. について、筆者仮説によって簡潔に解釈してみたいと思う。

### 1. 新情報と旧情報の原理

関根(1989)が引いた事例<sup>v</sup>について見てみたいと思う。以下のとおりである。

むかし、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさん八山へ芝刈に、おばあさん八川

へ洗濯に行きました。(……) おばあさんガ桃を切ろうとしました。すると桃ガ二つに割れて中から大きな男の子ガ生まれました。

関根 (1989) は、上のガのように、明らかに既知であるにも拘らずガが使われる場合があることを指摘している。もしその逆の、未知であるにも関わらずガが用いられる反証を挙げるとするならば、『吾輩は猫である』の出だしがそれに当たるであろうか。

上の昔話の中のガとハは、筆者仮説に即して解釈するならば、「強調」と「限定」という極めて単純なものとなる。出だしは、「おじいさんとおばあさん」がまとまって一つの主語としてガによって強調され、「おじいさんハ〜」「おばあさんハ〜」はそれぞれ漠然と類似する主語の存在を感じさせながら、ハで限定し主語としている。他方、二つのガとガについては、それぞれの主語が均しく一つで類似するものの存在を感じさせないからガによって強調されている、と説明できる。

## 2. 文と節の原理

1) 鳥ガ飛ぶ時にハ空気が動く。

2) 鳥ハ飛ぶ時に羽をこんな風にする。

1) の「鳥ガ飛ぶ時にハ」は「鳥ガ飛ぶ」が「時」を修飾した構造に助詞「に」とハが付いた副詞節である。「飛ぶ」という一瞬の状況描写としての「時」に具体的なイメージを与える修飾語句には特定の動作主が必要とされるため、ガが使われる。一方、「〜ハ飛ぶ時に」は主体が違う類似するもの、例えば「飛行機ハ飛ぶ時に」「コウモリハ飛ぶ時に」等が存在するので、ハで限定されないと落ち着きが悪くなるから、と説明できる。

## 3. 対比と排他の原理

野田 (1996) は、二種類の排他（排他専用の「が」と排他兼用の「が」を表わす「が」）として、以下2例を挙げている<sup>vi</sup>が、筆者仮説から見ると、解釈が大きく異なってくる。

3) 大阪より神戸のほうがいい店がある。

4) 君が主役だ。

上掲3) は両方を比べた結果一方が突出し、かつ類似するものの存在がないため、ガによる単純な主語の強調であり、そこから排他のニュアンスは感じ

られない。4) も同様な理由からガが使われているのであり、やはり排他のニュアンスは感じられない。「対比」と「排他」の意味は、以下事例のように、むしろハによって表されているものと考えるべきであろう。

5) 兄ハ細身で、弟ハ太っている。「対比」

6) 私ハりんごハ好きです。「排他」

## 2. 3. 筆者仮説による「〜とハ思う。」の解釈

前章1.2.の①②③を再掲し、筆者仮説に基づいて、論じてみたいと思う。

① 頑張ろうとハ思います。

② ベストを尽くそうとハ思います。

③ 金メダルを取ろうとハ思います。

筆者仮説に基づく、①②③の示す事柄は、漠然と存在が感じられる多くの類似の事柄の中から、ハの「限定」によって浮かび上がった特定の事柄であるということになる。

より具体的に見ていくため、①に絞って見ていくことにする。①の「頑張ろうとハ思います。」は、前述のように、ハの「限定」によって浮かび上がった特定の事柄であり、同時に同列に漠然と多くの類似する事柄が存在していることになる。それら類似する事柄は、より強気な内容のものから逆に弱気な内容のものまで、オリンピック出場を目前にした選手が想念として持ちうる全ての事柄である。表現形式も、単文に留まらず重文・複文、あるいはより長いものまで可能であろうと思われる。多岐に亘る類似する事柄の中から、ハで「限定」されることによって①は、それ以上でもそれ以下でもない「頑張ろうとハ思います。」という限定的な表現になってしまっている。

視聴者の側も、類似した事柄の存在を漠然と感じているため、単文レベルで言えばそれ以上の内容、重文・複文レベルで言えばより確かな展開を期待することとなる。しかし、ハを用いた限定表現によって視聴者の期待が満たされなくなった時、逆方向の悲観的な事柄を連想させ懷疑的にしてしまうのだと推測される。単文レベルでは、より自信に満ちた「メダルを取ろうと思う」「金メダルを取ろうと思う」ではないのかと、重文・複文レベルでは、「頑張ろうとハ思う。」に続く展開が、逆説的な「が、メダルは取れないかも知れない。」「が、どうなるか分からない。」云々と繋がって



いくのではないかと。積極的なコメント③の「金メダルを取ろうと思ひます。」でも視聴者の連想する展開は同じである。すなわち、短文レベルでは満足しても、重文・複文レベルでは、「が、結果がどうなるか分からない。」「が、上手く行かないかもしれない。」云々と繋がっていくことを悲観的に連想し懐疑的になってしまうものと考えられる。

結局のところ、「頑張ろうと思ひす。」から感じる違和感は、ハの限定表現に起因し、期待が満たされなかったことによって連想される悲観的な内容・展開から、暗に感じてしまう一種の物足りなさ、自信のなさ、のようなものであらうと考えられる。次節に、同様な事例をもう一つ見ておきたい。

#### 2.4. 「すまないと思ひす。」から感じる違和感

「すまないと思ひます。」と深々と首を垂れている謝罪に、なぜか、違和感が残る。2.2. 同様、筆者仮説に基づいて解釈すると、ハの「限定」によって浮かび上がった「すまないと思ひます。」の同列に多くの類似表現が存在していることが感じられてくる。類似する事柄は、単文に留まらず重文・複文の類似する事柄、至っては釈明者の発言として考えられる全ての表現が、漠然と並ぶことになる。視聴者が同列に漠然と存在するより積極的な類似表現の存在を感じた時、「すまないと思ひす。」というハを用いた限定表現は、視聴者の期待を満たさなくなるので、前節同様、悲観的な内容・展開を連想させ懐疑的にしてしまうのだと推測される。

短文レベルでは、より強い謝罪の気持ちを感じさせる「誠に申し訳ないと思ひす。」「非常に申し訳なく思ひす。」ではないのかと。重文・複文レベルでは、「すまないと思ひます。」に続く展開が、逆説的な「が、不可抗力であつた。」「が、責任を取ろうとは思ひていない。」云々と繋がっていくのではないかと。

結局のところ、「すまないと思ひす。」から感じる違和感も、ハの限定表現に起因し、期待が満たされないことによって連想される悲観的な内容・展開から、暗に感じてしまう一種の物足りなさ、一種の潔さのなさ、逃げ、のようなものであらうと考えられる。

3.1. そもそも、「～とハ～。」という限定的な表現は、否定文に多く見られる形である。そのような限定

的な表現形式が否定形として多用される所以は、ハで「限定」することによって、謙虚に、物事の一部分のみを打ち消す「～と思ひない。」「～と思ひえない。」とした方が、日本人の言語習慣的側面に合致し、より自然なものとして感じられるためであらう。その真逆の表現形式に相当する限定的な肯定表現、すなわち最近多く聞かれるようになった「～と思ひす。」についても、同様に、謙虚な心理に起因した結果として、否定形式から肯定形式へ取り込まれたのであらうと推測される。

#### 最後に

「～と思ひす。」の違和感の正体は概ね解き明かした。今後は、筆者仮説に基づいて、これまで難しいとされてきた殆どのハとガの事例の体系的な説明が、その実、可能であることを積極的に示して行きたい。

#### 注釈

<sup>i</sup> 増井金典の22項目に及ぶハとガの比較・対照：①主体を示すこと ②現前の主体か、抽象的か ③物語文か、品定め文か ④心情に訴えるか ⑤気づかせるか、否か ⑥場を持ち出すか、場に連れ出すか ⑦既知か、未知か ⑧重点の置き方が主語か、述語か ⑨資格を示すか、文の叙述に係るか ⑩主従関係か、題述関係か ⑪遠くに係るか、近くの語と結合するか ⑫総括する主語と、部分的な主語 ⑬現象を描写するか、とりたてて解説するか ⑭具体的か、一般的か ⑮概括的に包括するか、どうか ⑯列叙的叙述の有無 ⑰対比的用法の有無 ⑱対象語を示すこと ⑲仮定条件を示すこと ⑳前提となる文の主語 ㉑疑問文・慣用句の主語 ㉒限定にすぎない「が」と「は」

<sup>ii</sup> 野坂信彦 (2014) 『ハとガの謎を解く』 ブイツーソリューション pp.15-16

<sup>iii</sup> 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』 くろしお出版 pp.108-109

<sup>iv</sup> 坂野信彦 (2014) 『ハとガの謎をとく』 ブイツーソリューション pp.64-65

<sup>v</sup> 同上 p.104

<sup>vi</sup> 関根重一 (1989) 「係助詞『は』と格助詞『が』の機能分担について」 法政大学 『日本文学誌要』

p.72 (ハ、ガ、ガの表記は筆者)

vii 野田尚史 (1996)『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』  
くろしお出版 p.230

## 文献

1. 野田尚史 (1996)『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』  
くろしお出版
2. 坂野信彦 (2014)『ハとガの謎をとく』 ブイツー  
ソリューション
3. 関根 重一 (1989)「係助詞『は』と格助詞『が』  
の機能分担について」 法政大学 『日本文学誌要』
4. 丹波哲也 (1999)「主題文の性格と『は』の使  
用条件について」 『大阪市立大学文学部紀要』第  
五十一巻 第五分冊

# Research on the Japanese expression " ～towa omou."

Tomoyoshi Takemura

## Abstract

We often feel strange unnaturalness from the Japanese remark " ～towa omou." What is the true nature of that unnaturalness? We first examine previous research on the principles of use of the Japanese particles "wa" and "ga", and to further those principles, we presented "the core of the grammatical function of "wa" and "ga". Next, based on "the core of the grammatical function of "wa" and "ga", we clarified the true nature of the unnaturalness felt from " ～towa omou."